

斎藤 環 [著]

イルカと否定神学

—— 対話ごときでなぜ回復が起こるのか

A5判並製・医学書院

2024年10月刊

定価2,200円（税込）

評者＝岡本亜美（個人開業）



本書は臨床家必読の名著が揃う「シリーズ ケアをひらく」の一冊である。「ひきこもり」を個人の病理ではなく「システムの病理」として社会に開き、新たなコンテキストを立ち上げた著書『社会的ひきこもり』が出版されたのが1998年、ちょうどその本が出たころ、私は毎週末、ひきこもり当事者の方たちと過ごしており、その本からも多くを学んだ。著者は変わらずひきこもり支援の現場にありながら、近年はオープンダイアログ（以下、OD）という治療的介入を積極的に日本に紹介してきた。

ODはフィンランドの臨床心理士、家族療法家Jaakko Seikkulaが発展させてきたチームで行う対話実践である。本書『イルカと否定神学』の「イルカ」とはG Batesonのコンテキスト論を、「否定神学」とはJ Lacanの精神分析理論を示す。著者は本書でこれらの概念を導入し、その限界とツールとしての有効性を明らかにしようとする。もちろん本書ではそのほかの理論との対話も続いており、モノローグをダイアログに開くポリフォニーを用いたMM Bakhtin、身体的次元を加えたリフレクティング・プロセスを提示したT Andersen、隠喩の基盤に身体感覚をおき容器のメタファーを用いたG Lakoff、本書と同じシリーズの『中動態の世界』で能動と受動の対立を論じ中動態への注目を高めた國分功一郎など、読み進めれば自然にODに影響を与えた思想を学べる良きガイドともなっている。

なかでも「自己は世界の中心であると同時に、世界の一部であるということ」など、著者が大切にその言葉を反芻する中井久夫への敬慕は、はからずも中井が言った「言語化への心のそぎをさせる衝迫の抗えなさ」（中井久夫（2022）私の日本語雑記、岩波書店、p.48）に対する静かな抵抗に感じられ、ODにおける慎重さともつながり、本書をさらに丁寧なものにしている。

私は精神分析家であるため、本書で著者が再評価した否定神学がODのプロセスにおけるゼロ地点を記述

する概念として活用される展開には特に惹かれた。一方、否定神学という概念は東浩紀の否定神学批判の文脈に固定化している印象もあり、著者ならではの表現で言語の作用が語られ始める166頁くらいまではもやもやした。しかし本書が示すように、このようなもやもや対話のプロセスであり、このような不確実性に耐えることの重要性はどの治療的アプローチにおいても共通だろう。言葉は全て隠喩であり、その不確実性ゆえに他者の異質性は維持され、G Batesonのいうコンテキストに揺らぎの可能性が生じる。病因を探るのではなく、膠着したコンテキストをときほぐすということがODによって特になされやすいとしたら、それはやはりODが患者との場を、身体と言葉両面において距離と類似性を維持する複数の主体の言葉が連鎖していくポリフォニーの場と見なすからだろう。著者があえて「対話ごとき」と形容するものは実はそんなに当たり前ではないというのも臨床家の共通認識だと思う。ODがそもそも急性期の統合失調症患者への介入として開発されたことを考えれば、その実感が如何なるものかも想像がつくだろう。言葉の隠喩性が失われそうな局面に即時介入できる機動力は精神分析にはない。本書で学んだプロセスの記述のための語彙を多くの人と共有し対話を続けられたらと思う。